妻が殺害された部屋を借り続けて２５年、幼かった長男と生きてきた夫が願うこと　警察の広報活動にも取材にも毅然と応じてきた。「悲しむ姿を、絶対に犯人に見せたくない」

12/13(金) 9:02 配信

47 NEWS

妻が殺害された後も借り続ける現場アパートの部屋で取材に応じる高羽悟さん＝２０２４年１１月、名古屋市

１９９９年１１月１３日の夜、高羽悟（たかば・さとる）さん＝名古屋市＝が乗っていた車の中ではラジオが流れていた。午後１０時のニュースが最初に伝えたのは、自宅で起きた事件のことだった。高羽さんはこう感じた。「日本はうち以外、平和だったんだな」。この日、名古屋市西区のアパートで、妻奈美子（なみこ）さん＝当時（３２）＝が何者かに殺害された。そばには、まだ幼かった長男がいた。

【写真】「被害者の遺体を、魚市場で冷凍。大型の機械でばらばらにし…」。語られたのは、ショッキングな遺体の「処理」方法。　遺族は「息子を返せ！」「遺骨でもいいから握手したい」　驚きの動機…「そんな理由でなぜ殺す？」

事件は未解決のまま２５年が過ぎた。６８歳となった悟さんは年金生活の今も「いつか解決につながるかもしれない」と、血痕が残る現場の部屋を借り続けている。費やした家賃は２１９３万円になった。

最も恐れるのは、事件が風化することだ。そうならないよう、殺人事件の遺族会の役職を引き受け、被害者支援制度の整備に向けて奔走する。この２５年、そしてこれからも、妻の存在が原動力だ。（共同通信＝岸本靖子）
▽「妻の死因は？」問いかけに、刑事は困惑の表情を浮かべた

事件が起きた日の午前中は、いつもと変わらない普通の日だった。午後、職場にいた悟さんは、柿のお裾分けをしようと部屋を訪ねた隣人から「奈美子さんが倒れている」と連絡を受け、一目散に戻った。

奈美子さんは真っ赤な血に染まったフローリングにうつぶせに倒れ込んでいた。脚は廊下にぐったりと投げ出され、左の額が腫れ、めがねはくしゃっとゆがんでいた。奈美子さんの肌はあまりに白く、最悪の結果を覚悟した。当時２歳だった長男の航平（こうへい）さんは無事で、おびえるような様子もなく現場にいたと聞かされた。
慌ただしく出入りする救急隊。臨場した鑑識課の刑事に何度も名前や生年月日を聞かれた。今朝まで元気だったのに、なぜ。戸惑ったまま「死因はなんですか」と問いかけると、刑事は困惑した顔でこう答えた。「首を切られています。誰かに切られたかもしれないし、自分で切ったかもしれない」

再び奈美子さんに目をやると、手の甲に抵抗時にできたようなめくれた傷があった。穏やかで敵を作るような性格ではない妻。恨みを持たれる相手など、全く心当たりが無かった。

事情聴取を受けた後、やっと遺体が収容された。実家に向かう車内で流れたラジオのトップニュースは、事件のことだった。最愛の妻を亡くした衝撃と、航平さんと２人きりになった現実。これからの人生のことは何も考えられなかった。
▽処分がつらい―。遺品でいっぱいの部屋に差し込んだ一筋の光

部屋の片付けに取りかかることができたのは、事件から１カ月半ほどたった年末年始のことだった。「人に頼めることではないから」と４日かけて、床にこびりついた血を拭き取った。結婚からわずか４年４カ月。奈美子さんが大切に集めていたＣＤや本を整理しようとしても、新生活のために新調した家具を処分しようとしても、精神的な負担はあまりに大きかった。

そんなとき、遺品を取りに来た奈美子さんの母親がこう言ってくれた。「少しはそのまま残しておいても良いんじゃないかな」。この場所にまだいても良い―。気持ちがすっと楽になった。

数年後、現場を訪れた専門家の指摘で、玄関に残っていた血痕は奈美子さんのものではなく、犯人のものとみられることが分かった。すぐには無理かもしれないが、科学捜査の進展や、法整備で事件解決につながるかもしれない。周囲にも「犯人のＤＮＡを持っている遺族なんて、日本中探してもそういない」と後押しされ、現場保存のため家賃を払い続ける意義を感じた。一筋の光が差すようだった。

▽遺族が味わう無限の時間を名称に。「宙の会」との歩み

２００９年２月、未解決殺人事件の遺族らでつくる「宙（そら）の会」の発足に携わった。被害者や遺族が味わう「無限の時間」を「宙」の一文字に込めている。会は当初、殺人事件では２５年などとされていた時効の撤廃を目標に掲げた。それは、わずか１年２カ月後の２０１０年４月に実現した。環境や境遇は違えど、突如事件に巻き込まれ遺族となった人たち。意見交換したり、一緒に国へ陳情したりすることに、やりがいを強く感じた。

会が実現を目指していることは他にもある。遺族らが加害者に損害賠償を求める訴訟を起こし、裁判所が賠償を認める判決を出しても、加害者側に支払い能力がないケースは多い。そんなとき、国が賠償を肩代わりし、その分を後になって加害者側に請求する「代執行制度」の導入は、会の目標の一つだ。家計を支えていた働き手の家族が犠牲になり、残された子どもを抱えて生活に困ることも少なくない。そのような遺族と交流する中で、強く問題意識を持つようになった。

ほかに、ＤＮＡから得られる可能性がある情報を、捜査で活用するための法整備なども求める。時効撤廃の時ほど手応えは感じられていないが、「それでも訴え続けることに意味はある」と力を込める。

悟さんはこう語る。「遺族に節目はなくて、正直２４年も２５年も２６年も変わらない。遺族だからできた体験もたくさんあった。少しでも遺族会の主張に理解を深めてもらえるよう訴えていきたい。奈美子の死を無駄にしたくない」

▽「奈美子、息子はでかしたぞ」

未解決事件の遺族が最も恐れることは「風化」だ。悟さんは２０２４年１０月末、事件の捜査本部が置かれる愛知県警西署で、約７０人の警察官を前に講話した。８割以上が事件後に警察官になり、発生当時のことを直接は知らない。事件捜査の進展を願い、遺族の思いを打ち明けた。

講話で強調したことがある。警察の広報活動や報道陣の取材に毅然と応じてきたということだ。その意図をこう説明した。「航平が前向きに元気に育つまで、自分が悲しんでいる

姿を絶対に犯人に見せたくない。ざまあみろと思わせたくない一心で活動してきた」

　退職後には地区の町内会長を担い、地域の人々と関わる場面も増えた。そして、高羽家には今年一の重大ニュースがあった。

　航平さんが１１月１１日に結婚した。相手は、奈美子さんの友人の娘で、航平さんと同い年の咲月（さつき）さん（２７）。

　この２５年で、同じ遺族として一緒に過ごしてきた義母ら大切な人たちを失ってきた。「家族は減るばかりだったので、今年は特別な思いで仏壇に良い報告ができた。奈美子に、あんたの息子はでかしたぞ、と」。そして続けた。「犯人が捕まったという報告も、一刻も早くできれば」。悟さんの左手の薬指には結婚指輪が光っていた。

　×　　×

　名古屋の主婦殺害事件　１９９９年１１月１３日午後、名古屋市西区稲生町のアパートで住人の主婦高羽奈美子さんが首などを複数回刺され殺害された。愛知県警はこれまでに延べ約９万８千人の捜査員を投入し捜査してきたが、いまだ解決に至っていない。目撃情報や現場周辺に残された血痕などから、犯人は現在６０～７０代の女で、血液型はＢ型。身長約１６０センチ、靴のサイズは２４センチとみられる。左右どちらかの手に傷が残っている可能性がある。室内は物色されておらず、盗まれたものはなかった。情報提供は西署刑事課、電話０５２（５３１）０１１０まで。